

チベット仏教の世界 ー仏教伝来からダライ・ラマへー

第28回雲南懇話会 2014年4月19日（吉水千鶴子）



チベット民族の文化

- 仏教を中心とした生活と文化
- かつては寺院・僧院が社会の中心（政教一致）
 - 信仰、学問、教育の中心
 - 経済の中心
 - 政治を支える、動かす（仏教政治）
 - 外交の窓口
- 僧侶はこれらの役割を果たす

ダライ・ラマ14世

政治的指導者から精神的指導者へ

＜転生活仏＞

1935年アムド（現・青海省）に生まれる

3歳の時に「ダライラマ」と認定

1940年、ラサで即位

1959年、インドへ亡命
ダラムサラで亡命政府
樹立

1989年、ノーベル平和
賞受賞



チベット民族の歴史

- 古代（7世紀～842）
 - 古代王朝の時代
- 中世（842～1642）
 - 氏族政治と元朝支配
- 近世（1642～1949）
 - ダライラマ政権の成立と帝国主義の時代
- 現代（1949～）
 - 中華人民共和国による併合とディアスポラ

チベット古代王朝（吐蕃）の時代

- 唐と並ぶ強大な軍事国家
 - *753年玄宗皇帝に拝謁した日本、新羅、サラセン、吐蕃の使者のうち、吐蕃と新羅が上座に置かれた（『続日本紀』遣唐副使の報告）
- 唐・ネパールなど周辺諸国と通婚
- 唐、西域、ネパール、インドという仏教文明国に囲まれていた
- 敦煌を支配下に置く



唐蕃会盟碑(823年)大招寺

821年の糖との和平の決議文を記す

吐蕃の領土



古代王朝時代：年表

- 620代 ヤルルン王家6代目ソンツェン・ガンポ王、官位十二階制を発足させ、国家統一
 - *日本の冠位十二階制（603年聖徳太子・蘇我馬子により制定）
- 640 グンソン・グンツェン王（643年没）唐の文成公主を后とし、カムに住む
- ネパール皇女ティツウンを後に迎える
- 646 文成公主、釈迦像を唐から求めてラモチェ（小招寺）に祀る（グンソン・グンツェン王の弔い）、ソンツェン王と再婚
- 649 ソンツェン王没
- 651? ソンツェン王の供養のため? ネパール妃ティツウン、トゥルナン（大招寺）を建立
- 710 金城公主ティデ・ツクツェン王（7歳）に嫁ぐ
- 761 ティソン・デツェン王、仏教国教化、ネパール経由でインド、ナーランダ僧院のシャーンタラクシタを招く（いったんネパールへ退き、770年代再入蔵）、サムエー僧院の建立
- 763 チベット王朝、長安を占領
- 779 サムエー僧院本堂完成、インドから12人の僧を招き、チベット人6人を出家させる（具足戒を授ける）
- 786 敦煌、チベットの支配下に入る
- 842 ダルマ王暗殺され、王朝は後継者争いによって分裂する

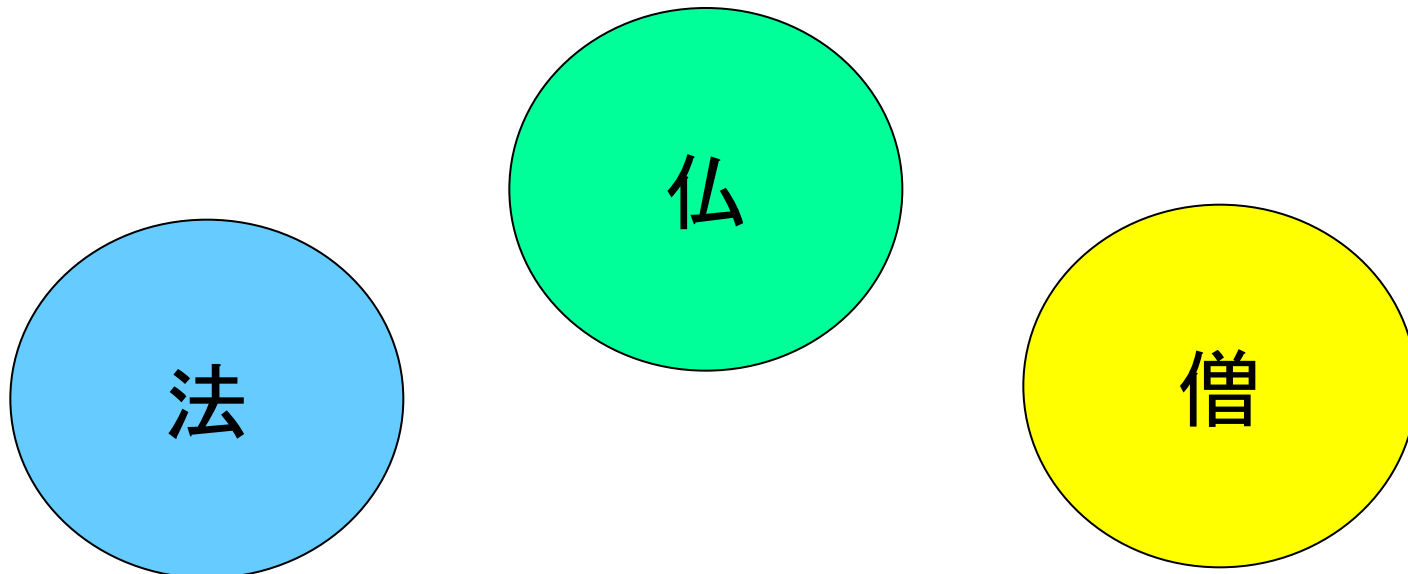
仏教伝来とは？

2013/09/04

- 何をもって仏教伝来というのか？

仏の姿（信仰の対象）、教え（経典）、担い手（僧侶）

= 三宝である仏法僧の伝来 * 日本でも同じ



1) 仏像がもたらされる（寺院の建立）

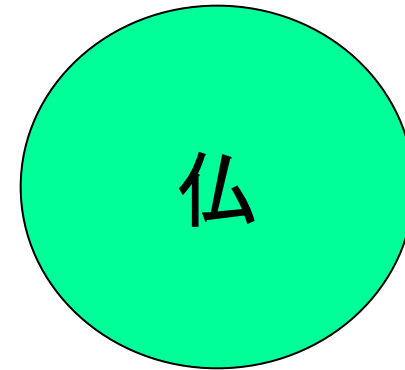
646年仏教伝来

- 646 文成公主、釈迦像を唐から求めてラモチェ（小招寺）に祀る（後に大招寺へ移動、現在はティツウンが招来したといわれる釈迦像を祀る）。
 - ・ *日本の仏教伝来：538年百済より仏像、經典がもたらされる。
- 651？ソンツェン王の供養のため？ネパール妃ティツウン、トゥルナン（大招寺）を建立、十一面観音を祀る（現在は文成公主が招来したといわれる釈迦像を祀る）。
- 金城公主、仏堂を建立させる（カチュ、ナムセル）
 - ・ *日本、588年蘇我馬子、法興寺建立、593年、聖徳太子四天王寺建立

2013/09/04



大招寺・釈迦像（ラサ）



信仰・礼拝の対象

ティツウン



文成公主



2) 教えを学ぶ（経典の翻訳）

- 唐へ
 - 740代 金城公主の夫ティデ・ツクツェン王、唐へ留学生を派遣、成都で新羅出身の僧金和尚に学ぶ
 - * 763年10月 唐の長安を占領
- インド僧の招聘
 - 761 ティソン・デツェン王、仏教国教化を決意、ネパール経由でインド、ナーランダ僧院のシャーンタラクシタを招く（いったんネパールへ退き、770年代再入蔵）
- 767 仏教導入のための使節団を唐へ派遣
- 経典翻訳事業はじまる（サンスクリット語、漢語両方からチベット語へ翻訳する）

2013/09/04

教えを説く經典



法

チベット大蔵經(北京版) 大谷大学所蔵

3) 僧団の育成（戒律を授け出家させる）

- 775 サムエー僧院の建立始まる
 - * 寺院は礼拝の場所、僧院は僧侶の生活と修行の場
 - 地鎮祭にはパドマサンバヴァが招かれる
 - 779 サムエー僧院の本堂完成
 - シャーンタラクシタ、インドから12人の僧を招き、チベット人6人を出家させる（具足戒を授ける）
 - * 日本、753年鑑真和上の来日による東大寺戒壇院の設立
 - ティソン・デツェン王は王臣を集めて崇仏誓約を行う
- 786 敦煌、チベットの支配下に入る
禪僧摩訶衍、招聘される

僧

僧＝僧伽＝教団
戒律を守って暮らし、
学問と修行を行う出家教団



チベット最初のサムエー僧院



ゴマン学堂で学ぶ化身ラマたち

(インド内)デプン僧院ゴマン学堂の僧たち
僧侶の姿に注目(無所有、無欲、無執着)

[2] 土着の信仰との摩擦 ～再び日本の事情との類似

- 土着宗教：自然崇拝、霊の信仰、儀礼、民間信仰、神話、部族宗教
 - 政治や国家の強力な基盤となる整えられた教義と組織をもつ宗教は存在しない（経典、教団はない）
 - ヤルルン王家の宗教（＊大和朝廷、天皇家の宗教）
- 仏教は先進国の宗教・文化（唐）
- 外来宗教への抵抗
 - 土地の神の怒り（災害、疫病などへの恐れ）
 - 政治的権力闘争（新勢力、旧勢力の争い ＊蘇我、物部氏）
 - 司祭階級（国家祭祀の担い手）の仏教僧侶への反発

チベット土着宗教 v s 仏教

- 「ポンポ」司祭者の範疇のひとつ
- 仏教：僧侶への崇拜
- 「霊神ラ」の信仰、死後に「死者の国」（神の国）へ赴く
- 仏教：輪廻からの解脱を目指す
- 「動物犠牲」葬送儀礼路のひとつで死者の旅路の供とす
- 仏教：殺生禁止
- 密教者パドマサンバウの鎮祭に（サムエーの地のため3ヶ月滞



[3] サムエーの宗論というできごと ～インド仏教 v s 中国仏教

禅僧摩訶衍 v s シャーンタラクシタの弟子カマラシーラ

- 摩訶衍の信者が増大し、后も出家、これにインド仏教徒が抗議、禅宗が禁止されると禅宗の徒が抗議自殺をするという事態の打開
- 御前論争（王の前で論争する）で決着をはかる
- 論争後、摩訶衍は敦煌へ退くが、中国仏教が排除されたわけではない（敦煌ではチベット語で書かれた禅宗文献も多数出土）
- カマラシーラの暗殺

インド仏教採用の理由

政治的理由？教義的理由？純粹に論議に勝ったから？インドは仏教発祥の地だから？

個人的な悟り（無念無想による頓悟）を目指す禅よりも、戒律を守り、教団を中心として慈悲という大乘仏教の理想を掲げるインド仏教は、国家経営により適していた

王朝の庇護下で隆盛を極めていたナーランダ僧院というモデルに倣おうとしたのではないか

中世チベットの社会と仏教

842年チベット王朝分裂～1642年ダライラマ政権の成立

[1]

仏教の復興と宗派の成立

- 国家から民間へ～氏族と民衆が支える教団(宗派)
- 支配者モンゴル(元朝)を支援者に
- 聖俗の中心としての寺院
政教一致体制(仏教政治)の始まり

[2]

仏教の多様化

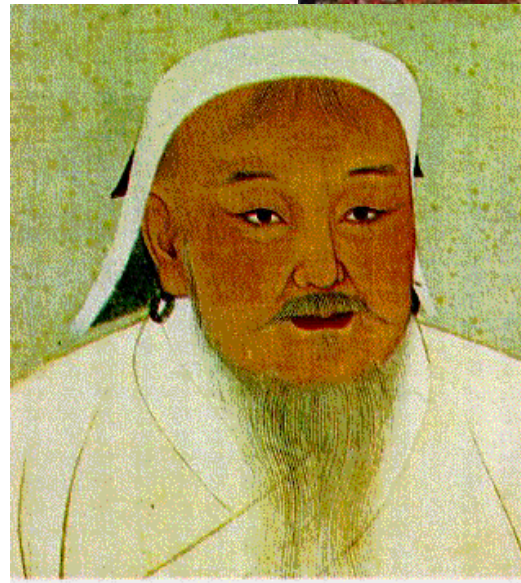
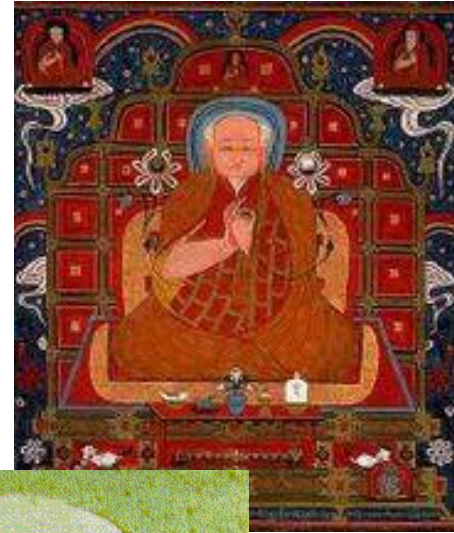
国家の統制が無くなった間に様々な要素が入り込む

- 顕教と密教
- 民間信仰
- インド仏教と中国禅
- ポン教

中世：年表

- 900年代末～1100年代中頃 各地に仏教が復興し、僧院が建立され、宗派ができる
- 1239 モンゴル、グデン（チンギス・ハーンの孫）の軍チベットを襲う *日本の元寇 1274,1281年
- 1247 **サキヤ派高僧サキヤ・パンディタ、代表として交渉**
- 1256 カルマ・カギュー派のパクシ、モンケ・ハーンの師となる
- 1260 **サキヤ派のパクパ、フビライ・ハーンの国師（後に帝師）となる** *パクパ文字の発明
- 1271 フビライ・ハーン、元朝建国
- 1290 フビライ・ハーン、ディグン派僧院を破壊する
- 1349 **パクモドゥ派、中央チベットを支配下に置く**
- 明（1368～）、永楽帝（在位1402-24）各氏族の長に王の称号を与え、宗派の指導者に法王の称号を与える
- 1406 **パクモドゥ派、明より「闡化王」の称号を受ける**
- 英宗、武宗、チベット仏教に傾倒
- 1409 ガンデン僧院建立、ツォンカパ（開祖）とする**ゲルク派（黄帽派）**、ラサ大祈願祭（ムンラムチェンモ）を始め、勢力拡張

サキヤ・パンディタとパクパ（おじ 甥）

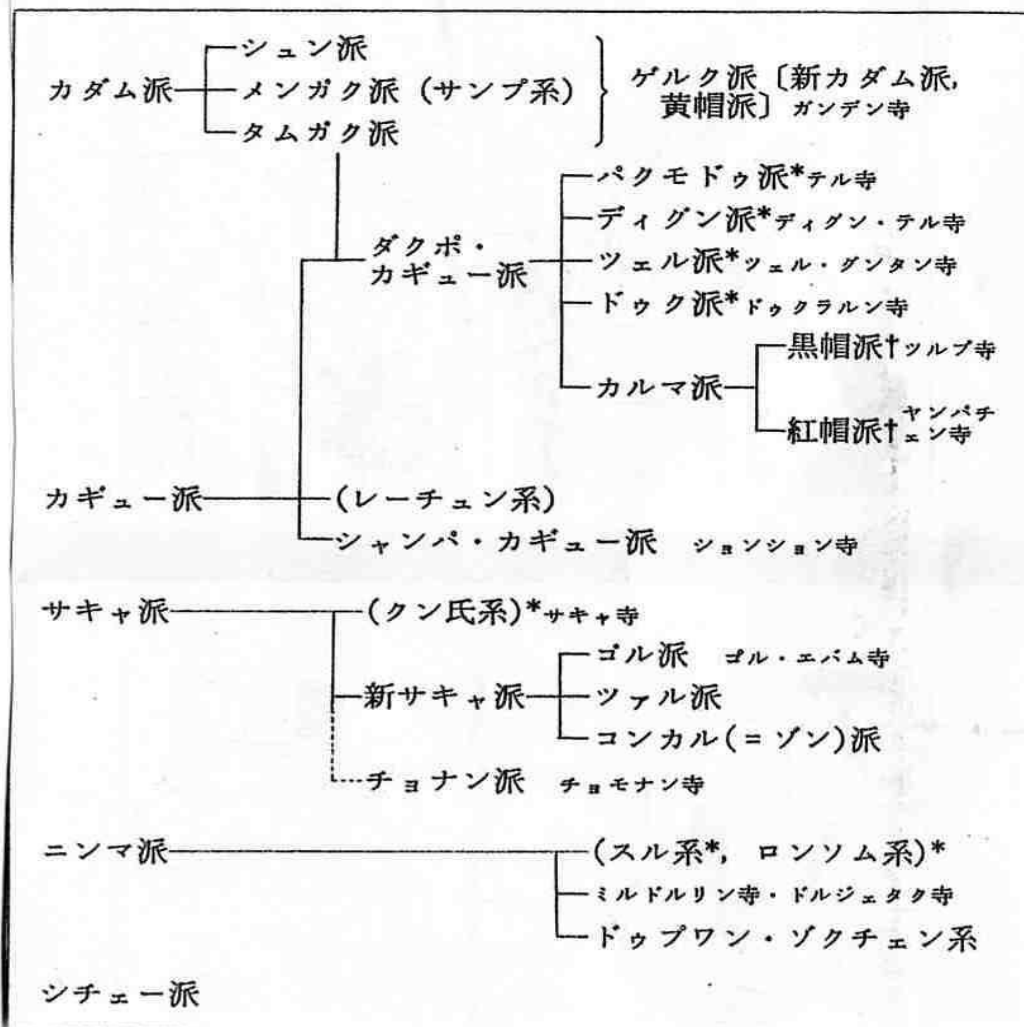


フビライ

宗派の成立

宗派系統図

*印は氏族教団, †印は活仏教団



富は寺に集まるのがチベット

寺院運営は人心掌握の上で大切

氏族から寺院中心へ
カリスマによる宗教的権威の創出
(活仏教団への移行)

転生活仏

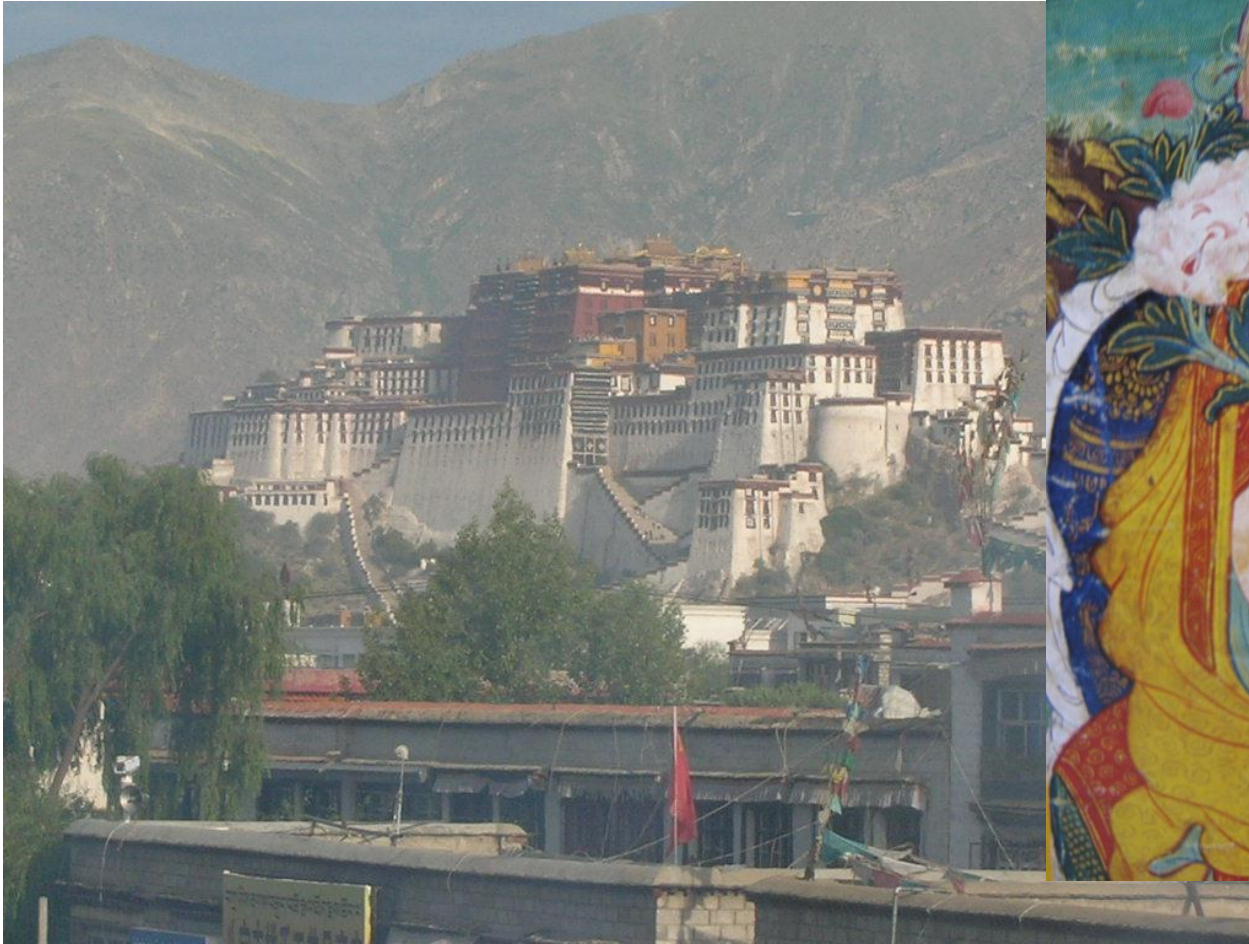
- 輪廻転生（生まれ変わる）というインド伝来の考え
- 大乘仏教の菩薩は人々を救うため、何度でもこの世に生まれ変わる（インド大乘仏教の理想像）
- 宗派のトップは転生活仏が相続する（チベット独自の制度）
- ダライ・ラマは観音菩薩の生まれ変わりであり、人々を救うため、何度も人の姿で生まれ変わる（チベット独自の考え）
- ダライ・ラマは常に政治的意図で選出されてきた。

近世へ

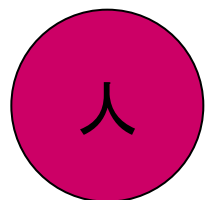
(年表) 転生活仏制度とダライ・ラマ政権の成立

- 1409 ガンデン僧院建立、ツォンカパを開祖とするゲルク派（黄帽派）、ラサ大祈願祭（ムンラムチェンモ）を始め、勢力拡張
- カルマ・カギュー（黒帽・紅帽）派転生活仏制度をはじめる
- 1544 ゲルク派ソナム・ギャンツォを転生活仏に認定
- 1589 モンゴル（元朝フビライ家の末裔）アルタン・ハーン、ソナム・ギャンツォと青海で会見し、「**ダライ・ラマ**」の称号を授ける（ダライ・ラマ3世）
- 1589 アルタン・ハーンの甥の子ユンテン・ギャンツォ、ダライ・ラマ4世に認定
- **1642** **ダライ・ラマ5世**、モンゴル（青海ホシュート部）グシ・ハーンの軍事力により、カルマ派勢力を鎮圧し、チベットを統一、**ダライ・ラマ政権成立**

ポタラ宮とダライラマ5世



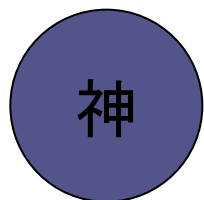
仏教の多様化 ～チベットの神々～



1) 仏たち (歴史的ブッダと空想上の如来)

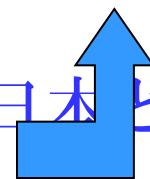
2) 菩薩たち (修行中の存在、空想上の菩薩)

* 密教では種類がとりわけ多くなる



3) 明王・天 (仏教の守護神、ヒンドゥー教由来)

同様 インド伝来、日本と



4) チベット土着の神々

土地の神

自然神、悪鬼

3) マハーカーラ（大黒天、シヴァ）とペンデン・ハモ
（吉祥天、シュリー・デーヴィー〔カーリー〕）
歴代ダライラマの守護神



4) ドルジェ・ダクデンとペハル (戦の神)

いずれもネチュン法王に神託を受ける



ペハル: サムエーにてパドマサンバヴァに調伏された

シャーマン、神託僧へ 降りる神は3) または4)

ニンマ派、ネチュン法王
(ダライラマ5世の時代
以降)

民間信仰の融合

予言、占い、修行僧の守護

悪魔祓い、呪術

魔よけ、竈神

タルチョー

ルンタ(風の馬) 馬の王

が人々を救うという故事
(馬の王は観音菩薩と同一視される)



ポン教

- 仏教とくにニンマ派と似た体系を作り上げる
 - 僧院、戒律、經典(埋藏經典)をもつ
 - 開祖シェンラブ
 - 西の国タジクの王子(イラン??)、西チベットのシャンシュンにポン教を伝える
 - 仏教よりも古い起源を強調
 - ニンマ派と同じ九乗の教判をもつ
 - 現在では東チベットに多い

